

## 国内商業に於ける自由と統制（二）：ケネーの商業理論

堀, 新一

<https://doi.org/10.15017/4151155>

---

出版情報：経済學研究. 7 (2), pp.85-136, 1937-08-10. 九州大学経済学会  
バージョン：  
権利関係：

# 國內商業に於ける自由と統制 (二)

—ケネーの商業理論—

堀 新 一

## 目 次

- 一、ケネーの商業理論
- 二、ケネーの商業理論批判
- 三、ケネーの商業理論の地位

## は し が き

早稻田大學教授久保田明光氏は、先に「ケネーの價值理論」(早稻田大學政治經濟學雜誌、第四十六號)なる一文を公にして、私の論文「商業機能學說の發展」(經濟論叢、第四十二卷第一號)に於けるケネーの商業機能觀に批判的に觸れられた。私は續いて發表した論文「價格構成に於ける商業の作用」(經濟論叢、第四十二卷第四號)に於ても、簡單ながら、この點に關する、私のケネー解釋と信するものを展開し、大

體久保田教授の御了解を得たものと思つてゐた。然るに、私の議論の尙徹底し居らざるやに思はれる理由もあるので、本稿に於てその徹底を期しようと思ふ。固より、私の本稿の目的は、私が目下企てる「國內商業に於ける自由と統制」の研究上の一齣として書いたものであるが、併せて久保田教授の批判に答へつゝ、ケネーを中心とした商業上の自由放任論の論據とその性格を明かにしようとするにある。

## 一、ケネーの商業理論

先づ最初にフランソア・ケネー (François Quesnay, 1694—1774) の商業理論に關する私の理解を述べ、次にこれに對する諸批判とその吟味の問題に移りたい。

**社會的背景** 重商主義時代には國內商品價格の低廉従つて勞賃の低廉が説かれ、穀物價格の低きことが要求せられ、ために、穀物流通が甚だしく阻害されたことは、既に述べた所である。<sup>1)</sup>特に都市製造業尊重の Colbert 主義の支配せしフランスに於ては、この傾向は甚だしく、「穀物の内國商業は氣儘なる監督に委ねられ、賣行は地方の間にしじゆう中絶し<sup>2)</sup>」、かくて、販賣への制限・價格の下落は必然、生産への自制となつて現はれ、農村は荒廢し、飢饉は瀕發した。これは國內商業は國全體の富の増減に關係なく、ただ外國への販賣を目的とせる工業の上に打立てられたる商業のみが、金銀を齎し、國富を

1) 拙稿、重商主義の國內商業統制 經濟學研究、第六卷 第四號

2) Note sur les Maximes VI Quesnay Oeuvres économiques et philosophiques. 1868: p. 342.)

致す所以なりとの彼等<sup>3)</sup>の根本思潮の必然的結論であるが、事實、穀物栽培は當時最も尊れざる地位にあり、生産費（或はケネーの根本價格 *Prix fondamental*）は農民の販賣價格を遙かに越え、賣り得ざる豊富は農民を最も悩ました所であり、農民は都市に走り、農村人口の減退・ケネー一派の理論を以てせば、これに依り養はるゝ國民人口は減退の一路を辿り、尤もこれには種々の原因もあるが、百年前には、二千四百萬なりし人口は、十八世紀の初頭には、千九百五十萬に減じ<sup>4)</sup>、土地の半は無毛に歸し（ケネー時代約三千六百萬アーパンの土地を耕し、四十五百萬セチエの小麥とあぐ<sup>5)</sup>）、而も富を持たざる農民は収益の少い牛耕作小耕作に執着し（その生産物は三千四百萬セチエ）、馬耕作大耕作には移り得ざる状態である。ケネー一派はこれが原因の主たるものを、穀物商業が制限せられ生産物が賣上價值（*Valeur Vénale*）を缺ぐ故然るのであるとなし（穀物流通自由が比較的認められし英國では當時一セチエ三十リーブルにもぼるにフランスでは八乃至十リーブルの事さへある）、こゝにケネーの有名なる而して本論の問題の中心たる、「夥多にして無價値なるは富ではない。不足にして高價なるは貧窮である。夥多にして高價なるが即ち富裕である」<sup>6)</sup>（*Abondance et non-valeur n'est pas richesse. Disette et cherté est mesure. Abondance et cherté est opulence*）の主張の社會的歴史的背景が生れる。

蓋し商業資本の發展・貨幣財産の集積・資本の工業方面への波及・この過程の一定段階への到達は必然これと不可離的聯關を持つ農業への資本進出の要求となつて現はれる。地域的に極めて豐沃なフラ

3) Quesnay, Grains (Oeuvres, p. 194.)

4) Quesnay, Hommes (Rerue d' Histoire des doctrines économiques et sociales, No. 1. 1908)

5) Grains. (Oeuvres, p. 195)

6) Quesnay, Maximes XVIII. (Oeuvres p. 335)

ンスに於ては、この要求は、最も早く且つ熾烈に現はれ、必然農村のかゝる疲弊、これが商工業への、市場として、原料供給者としての意義は、この現状への否定となつて發展せねばならぬ。ケネーの思想が、單なる重商主義の反動としてのみならず、その社會的地盤としては、當時に於ける佛國の農業資本主義化の要求を代辯するものなるは、私も先に力説した所であるが、その片鱗は既に、彼の初期の論文に馬耕の大耕作の必要を力説せるを以つても知り得る所であり、(小作人論 *Fermiers*, 1756「穀物論 *C. rains*, 1757)、これこそ農業尊重の彼の理論を背景づけるものである。

**價值理論と商業** ケネーの價值理論の貧弱を難する者は少くはない。然し私は必ずしもさうは信ぜない。否、今日の發展せる價值理論の萌芽が既にケネーの混沌たる思想の中に見出し得ると思ふ。

ケネーは一應財を使用價值 (*Valeur usuelle*) を有して而して賣上價值 (*Valeur véral*) を有せざるものと、使用價值並に賣上價值を有するものに分ち、財に於ける使用價值と賣上價值は必然的には關聯せず、これは有用性の少いダイヤモンドの賣上價值は、食糧品のそれを、特別飢饉でもない限り、遙かに越ゆるを以つても知らるゝ所なりとなし、元來使用價值はいつも同一であり又は多少人の欲望に關聯するが、賣上價值或は價格は人間の意欲より獨立し、氣儘な價值でも商人の協定でもないことを主張す。而してケオーに於ては「價格は賣買される爲の賣上價值」であつて、財は所有者が賣り得、買手により求めらるゝ時こゝに價格が附與せられ、それに準じて、富となるのであつて、<sup>8)</sup> 例へば、「ルキジアナの

7) 拙稿、重商主義の國內商業統制

8) *Hommes*, p. 22—25.

蠻人は、賣上價值をもたなかつたが故に富にあらざりし水・材木・鳥獸・土地生産物等の如き財を澤山享有してゐた。然し商業の二三の部門がフランス人イギリス人イスパニア人等との間に開設されて以來これらの財の一部分は賣上價值をもち富となるに至つた<sup>9)</sup>のであり、空氣水の如き買手をもたないものは「財 (les biens) であつて富 (les richesses) でない」と規定してゐる。而してケネーの價值論がいつもこの賣上價值を中心として進められてゐることも一應認めねばならぬ。

こゝに彼の價值論研究に當つて、先づ、解決せねばならぬ問題が二ある。一はケネーの所謂「高價」(Cherté) 「良價」(Bon Prix) がこの價值論と如何なる關係にあるかの問題であり、二はケネーの餘剩價值の把握はこの價值論と如何に結びつくかの問題である。先づ前者より問題とする。

ケネーは屢々「高價」「良價」なる言葉を用う。曰はく、「夥多にして無價値なるは富ではない、不足にして高價なるは貧窮である、夥多にして高價なるが即ち富裕である」。又曰はく「農業國は年生産物の豊富と良價によつてのみ富裕であり得る」。問題はこの「良價」「高價」の概念にある。

私はこの問題を以下の如く解釋する。ケネーは元來商品の價格を根本價格 (Prix fondamental) と之を越える部分とに分ち、根本價格は生産又は準備のため必要な支出又は經費であるが、價格よりこの根本價格を差引いた餘剰が、若しそれが根本價格以下でない限り残るわけであつて、この餘剰が農工商の收益として分たるゝわけである。尤もケネーに於ては生産物と價格・價值との混同があり、用語上には多

9) Note sur la Maxime XVIII (Oeuvres, p. 353)

少缺點もあるが、大體こゝまでは問題はない。ケネーの言葉を借れば「耕作者が生む再生産物は二つの部分に分たねばならぬ、即ち、自分の生活資料のためのものとこの同じ生活資料を越ゆるものと。これより次の結論が出る。若し人が全體の再生産を害することなくして最初の部分を制限せば、それだけ第二の部分をます。例へば再生産が二十であると前提せば、耕作者の支出は十であり、超過は十となり、支出が八に制限されるれば餘剰は十二となる」<sup>10)</sup>と。この場合問題は、この二十が果して消費者に亘る價格——今ケネーに従ひ以下價格と生産物の流用を一應お許を乞ふ——を指すものであるか、或は「第一の人の生産物の販賣」(La vente des productions à la première main) に於けるそれを指すものであるかである。私の解釋を率直に述べれば、この二十が即ちケネーの良價に當るものであり、ケネーの良價又は高價は最後の消費者に亘る場合の價格を指すものであるとするのである。蓋し市場價格は需要供給の關係によりこの良價から離れ或は下或は上にあるも——特に商品流通の妨げられてゐる時はこの乖離は大である——完全な自由競争の支配する所では、價格は良價又は高價の状態に落つくものであり、ケネーが豊富高價の必要を説明した後、「私は高價と豊富と永久的のものとして解す、何故ならば一時的な高價は全國民に對する富の一般的分配を得しめない、それは地主の収入も王の収入も増さず、それはその時高價にうるべき生産物をもつ若干の個人にのみ有利である」<sup>11)</sup>と云へる場合のこの高價は市場價格の意味に非ず、完全な自由競争の落着ける價格を意味するものと解することが出來よう。この點容易に我等の

10) Quesnay, Sur les Travaux des Artisans (Oeuvres p. 551)

11) Grains, (Oeuvres, p. 246)

理解できる所である。而して私は引用文句に於けるこの良價での販賣の主張は一面商品を價値通りに賣らるべきなりとの主張―前例では二十でうられる時は價値通り―であると思ふ。こゝに問題はこの二十の中に或は良價の中に含まれてゐるのは單に、彼等の生活資料その他を除いて、農業者の収益としてその手に入るものだけか否かの點である。我等は周知の農業者のみを生産的とし、商人工匠は何物も生産せず、農業者の負擔に於て養はれてゐるとのケネーの主張を思ひ出す。然る限り農業の生んだこの二十の中には當然商工業者に分ち與へられるものも含まねばならぬ。然らざる限り、若し商人工匠がこの二十に農業者より得ざる何物かを附加して、最後の消費者に渡すとせば、最早やケネー自身生産性不生産性の區別を取去ることゝなるから。事實ケネーはこの點を最も力説し、價格は賣買に先立ちて存在するものであり、交換は等價の交換であり、一方が利得するもそは他方の犠牲に於て然るであり、價値の總量には何の増減もなく、商人工匠は農業者の収益より自己の収益を引出すものであることを説く。即ち今二十を社會的總生産物とせば、二十の中に商人工匠に分ち與へられる部分が含まれてゐるのである。即ち上述の二十の中、生活資料として十耕作者の商人への賣上價値即ち最初の人の賣上價値が十五であるとせば、農夫は五の純収益を得、十五で商人にうり、「生産物は何度も商人及び職工の手に移るのを見ることがある」<sup>12)</sup>も、要は、この場合なれば、五の分け前を争ふのみで二十に何物も附加せず、従つて「流通を無益に數多くするところのこの賣上及び買入の繰返しは、富の生産ある事な

き貨物の置換、諸掛の増加に過ぎない。これが大體ケネーの文言並にその表はす思想に最も忠實な解釋であり、ケネーの價値・價格・高價（良價）・最初の人の生産物の賣上價値の概念並びに相互關係の最も忠實な解釋だと思ふ。

註 ケネーの高價 (Cherté) と良價 (Bon Prix) はケネーの著書一般を通じて、同じ意味に使はれてゐる場合が多い。而してその意味は、上述の如く、自由競争の落着いた價格で、スマスの正常價格マルクスの生産價格の概念に近いものと思ふ。ケネー自身も「穀物論」の中でかう述べてゐる。「かくて我等は、こゝに、高價 (Cherté) なる語を以つて、過度の價格を意味するのではなく單に我が國と外國との平均價格を意味する。何故ならば、外國商業の自由の假定のもとに於ては、價格は常に隣國の生産物の商業の競争により規制されるから」<sup>13)</sup>

然るに「人間」(Hommes) の或箇所に於てはケネーは高價 (Cherté) の概念を良價 (Bon Prix) に對立せしめて、不足を伴ふ高價 (La cherté avec pénurie) 或は人民に重く價格 (Le prix onéreux au peuple) の意味に用ゐて居る。「商品の根本價格は生産のため或は準備のためなさればならぬ支出又は費用により決める、若し商品が、支出以下で賣らるゝと損失に變はる、若しそれが生産を維持し或は増すべく刺戟するに十分の利得を得しめるため十分高くうられると、それは良價になる。若し飢饉によりそれが人民に重い價格となれば價格は高價である」<sup>14)</sup>と。尤もこの場合も、商業の自由があれば、この高價は人民に重くなくなり、良價に代ると考へるのであつて、商業自由制度のもとに於ては良價＝高價であるが、私は大體多くの場合彼が「良價」を以つて「高價」としてゐる關係上こゝでは「良價」と「高價」とを等しとして使つて來た。

これに對し異見を持つ人がある。久保田教授のその一人である。<sup>15)</sup> 教授によれば、前のケネーの「良

13) Grains (Oeuvs, p. 248)

14) Hommes, p. 28.

15) 久保田明光氏 ケネーの價値論、早稻田政治經濟學雜誌 第四十六號。

價」を「最初の人の生産物の賣上價值」の範疇に屬すとなし、高價はこの賣上價值の高きを欲するものであると考へられてゐる。こゝに高價を以て生産物の價值通りでの販賣への主張と見る私の見解との相違がある。成程ケネーは最初の賣上價值即ち耕作者の商人への賣上價值の高きを欲し、農業者の収益の可及的に豊かならんことを切望してゐる。即ち前例の十五が、更に十六、十七、十八たらんことを欲してゐることはケネーの主張より見て正しい。然しこれはケネーが最初の賣上價值の高きを欲するだけであり、同じく農業者の生産した生産物の中、當然起るべき農業者と商人工匠の収益分配の争に於て、農業者の味方をせるものであつて、これは彼が屢々「最初の人の生産物の賣上價值の大なる」ことへの主張となつて現はれてゐるが、これと商品の餘剩價值を含んで價值通り賣らるべしとする良價論或は高價論とは全然別個の問題であり、混同は許されない。即ち「夥多にして高價なるが即ち富裕である」とか「それ故一國の富裕は貨幣の量に存せず、取引され得る富の夥多と良價の裡に存す」とか云ふ場合の良價は前例の二十を指すものであり、而も二十は生産者より商人に亘る時のそれではなく、消費者にわたる時の價格である。或は云ふべし、最初の人の賣上價值の高きを欲する以上、これが前例の二十に達すれば最理想的なものであると考へらる、然らば結局同じ主張に歸するのではないかと。然し農業者の商人への賣上價值の高きことへの要求（商工と農業の収益分配の問題）と生産物の價值通りでの販賣即ち良價での販賣への主張とは概念的に全然別個のものなるのみならず、ケネー自身工匠商人は有用なものであ

り、農業者の負擔に於て一定の所得を—生活資料だけ受け取るが最も自然的秩序に合し、その收益はこの分前の中よりの節約のみでもたらさるべきなりとなす（この點は後にスミスが生産階級と比較して批判してゐる）—うけることを認める以上、良價を以て最初の人の賣上價値を意味せりとは思はれず、寧ろその所謂良價は最初の人の賣上價値プラスXと解さねばならない。

若し久保田教授の採る如く先例の二十を以て、第一の人の手に於ける生産物の販賣と解するなれば、必然商人はこれに何物かを加へて消費者に販賣することとなり、これこそまさにケネーが批判の對象とした思想であつて、商業は財貨の移轉に過ぎず、社會的總價格は賣買に先立ちて存在し、商業はこれが平均作用を行ふものに過ぎず、<sup>(註)</sup>交換は等價の交換なりと力説するのまかゝる錯誤を避けんが爲である。

ケネーの攻撃せる思想を以てケネー自身の思想なりとする久保田教授の見解こそ我等の批判の對象とすべきであらう。こゝに於てか私は久保田教授が私を難せられたケネーの言葉「商人は決して價格をも商業の可能性をも生ぜしめない」<sup>15)</sup>をツツクリその儘教授にお返し出来ることを喜ぶ。

尙久保田教授が賣買價値を以つて「最初の人の生産物の賣買價値なり」と解することも獨斷であり、「最初の人の生産物の賣買價値」は飽迄も「最初の人の賣買價値」であり、これと「賣買價値」自體とはケネーに於ても、全般的に見て、全く別物を指してゐるは云ふ迄もない。

註 商業は價格を水準化するが總體には何物も附加せないとケネーの主張は次の言葉で表現されてゐる。「自由

14) 久保田明光氏、ケネーの價値理論（早稻田政治經濟學雜誌、第四十六號）

15) Observations importantes (Oeuvres, p. 324)

競争による商業の交通の效果は通商する異なる國に於ける價格間の水準を維持するにある。この價格の世界的相殺は一つの自然状態を作り、こゝに於ては國民は、交換に於ても、價格の不平等に於ても、何物も失はぬ状態である。<sup>16)</sup>

「商業の競争によりこの場合起る變化は、その間に競争が連絡を作る異なる地方の間に不平等が存する時價格の同一化にすぎない。かくて餘りにも低い價格は餘りにも高い他の價格を犠牲として増すのみ、それはこの價格の全體に何物も附加せない、同様に生産物の異なる量を平均的量に歸することは生産物の量には何物も附加せない。故にこの調整に於ては不生産階級より生産階級に事實上與へられるものは何物もない。何故ならこの整調に與へられる資源は他の原因により前以つて存在するから、そしてこの原因は資源の全體に何物も附加することなくしてこの調整に協力する單なる條件と混同せらるべきではない」<sup>17)</sup>(傍點は堀)。

ケネーの思想中で興味ある所は平均概念がしばしば使用されてゐることである。「平均的數量」 *mesure commune* 平均價格 *Prix commun* 久保田氏も舉げてゐる所の平均的根本價格 *le prix commun fondamental* の如きこれであつて、我等はこゝに於てもマルクスの平均概念との一脈の聯關を豫感せざるを得ない。それは兎に角彼によればかゝる市場價格が相殺されて平均價格へ歸着するのであり、この平均價格が良價を指すものであることはケネーも屢々口にせる如くであるが、これは商人が消費者に賣る價格とは異なる賣上價值をもつて「良價」と見做す考へ方を當然支持し得ない。概念規定は理論展開と相反する解釋であることを許されない。

私の解釋と久保田教授のそれとの間の相違は要するにこゝにある。久保田教授によればケネーの良價高價は「最初の人の生産物の販賣」に於けるそれを指すものであり。商人は消費者にこの良價に何物

16) Du Commerce. (Oeuvres, p. 364)

17) Du Commerce. (Oeuvres, p. 452)

かを附加して手渡すもので、良價を價值通りでの販費と解する限り價值以上で賣られることであり、商人が價格を作ると主張せるものと解せらる。少くも久保田教授の概念規定ではかゝる理論展開をなすことは、ケネー自身の意に反するのみならず、久保田教授自身も豫期せざる所かも知れないが、これは已むを得ない。これに對し私の解釋はかうである。良價は根本價格十餘剩＝價值の意味であり、ケネーの「良價」又は「高價」を主張せるに、かゝる状態を望んだもので、これは自由商品により初めて實現される所とし、これこそ自然的秩序に最も合したものと考へたのである。商人はこの良價以下で商品を買ひ、これに自己の分前の収益を加へて良價にして賣る。この場合耕作業より最初の商人に賣る價格が所謂第一の人の賣上價值であり、ケネーは勿論これが高きを望んだが、これと「良價」とは全然別物である。この解釋に於てこそ、この概念規定に於てこの等價對等價（私の解釋ではまた良價對良價）の交換の主張が意義ある所であり、商人は決して價格も商業の可能性も生ぜしめないとの主張が理解されるのであり、ケネーの重商主義の偏商業論攻撃の背景とも和合的に理解出来るのである。久保田教授の考へこそ恐らくケネーの最後に攻撃の對象と考へた所のものであらう。勿論概念規定と理論展開は一應區別出来る。然し理論展開に矛盾せる概念規定を徒らに高唱するは特別の舉證なき限り、近代經濟學の父を解する正しき態度ではない。ケネーの「最初の賣上に於ける生産物の價格を本來保證するのは決して商人ではなくて消費者の必要でありそれを満足する手段である」（重要考察第六）との語も生活手段の

滿つる所至る所消費者ありとのケネーの主張、財は賣り得且つ買ひ得るものでなければ富でないとの言葉の反面に過ぎず、久保田氏の論を強める根據とはなり得ない。

次にケネーの價值論と餘剩價值の結び付き、更に商業利潤との關聯の問題に移る。我等はケネーの價值論の中に現代のそれへの萌芽とも云ふべきものを見出すことは上述の如くであるが、然らばケネーはかゝる價值論より出發して、果して正しき餘剩價值の姿を掴み得たか。この點に於ても我等はケネーの天才的閃きを見逃し得ざると共に、彼の社會的生の規定性―即ち封建制度より資本主義への轉換期を免れ得ず、一定の限界の中に閉ぢ込められてゐた點も、今日から見ればないわけではない。ケネーの云ふ所はかうである。農業のみが唯一の生産的部門であり、土地は耕作者の年消費以上のものを生むことが出来る。この餘剩は自然の物であり、純收入 (product net) であり、この純收入が商人工匠を養ふものである。而して商人工匠は自分の生活資料以上の何物も附加することなく、農業の生産する純収益に寄食するものであり、社會的に見れば一つの經費である。前述の例を以つてせば、良價より第一の人の賣上價值を差引いたものが、商人工匠その他を養ふ収益となるものであり、商人工匠に取去らるゝ部分が多ければ多い程農民従つて社會の負擔はより大なるものである。ケネーによれば結合されたる富の増加と富の生産―眞の増加を區別せねばならぬ。材料並にこの種の増加の前に存在した物の消費により一つの新しいものを作るのと富の眞の増加或は生産とは別個の概念に屬するもので、ここに工匠商人と農業

者の區別があるのであつて、この富の眞の増加は農業者のみよくする所である。そこで問題はこの場合ケネーにより把握された餘剩價值は何を指すかである。私は多くの人が云ふ様にケネーの著述全面を通じて見ればこの餘剩價值が必ずしも全く餘剩生産物の姿で把握されてゐると思はない。然し多くの場合この餘剩生産物或は素材或は使用價值より直ちに價值或は交換價值に飛躍せるは否定出来ない所であつて、彼の根本思想に於ては、少くも生産過程についてみれば、この餘剩を以つて使用價值素材或は物質的なものゝ姿に於て成立するものと考へたのである。ケネーに於てはかうである。年一石の生産資料を必要とする農夫が、年末に五石の生産物を發見せば、この四石が即ち自然の賜であり、餘剩である。尤もこの場合流通過程のみに餘剩の成立を見た重商主義に對し、これを生産過程の中に見出したことはたしかに一つの功績ではある。然しその見解は資本主義の初期にふさはしい如く、消費と生産の差異即ち餘剩の最も目につき易い農業の中に―これは自ら生産するものを消費する―のみ見出したこと、而も飽く迄も目に見えずで觸れ得る素材より離れなかつたことは、假令價值と價值形態とを混同した重商主義と形式的表現は異なるにせよ、この點ではその中に本質的差異を見出し得ないのである。價值の實體を労働量といふ一つの抽象的一般的ものに分析したのは、大體、スミス以降のことであり、こゝにケネーの生産性を農業にのみ見出したこともこの「價值分析の不十分」よりの必然的結果であつて、これ私が曾つて彼等によれば「價值は一の使用價值であり、素材であり、この價值分析の不十分は」<sup>18)</sup>

18) 拙稿、商業機能學說の發展（經濟論叢、第四十二卷 第一號）

と述べた所以でもある。久保田教授がこの言を以て、「尙同學士のこのケネー價值論の「分析の不十分」こそ遂に生産物の高價と商人の價格釣上との區別を不可能にしてしまつた」と評されるのは、その所以を知るに苦しむ所であり、寧ろこの言を以つて教授に返上したい所である。かくてケネーは生産過程に於ては、大體素材としての餘剰の成立を説くのであるが、分配過程に於てはいつしか貨幣價值が導き入れられて來るのであり、生産物は貨幣の仲介により地主階級、生産階級、不生産階級に分配されるのである。尤もこの場合貨幣が仲介の單なる媒介であり尺度であるに過ぎないことは彼も屢々云ふ所であるが、而も財は價格或は貨幣價值に準じて比例して富となるを認め、價格を中心に彼の理論を展開してゐる。

ケネーの價值論は使用價值と賣上價值の別に出發點をもつことは我等の既に見た所であるが、このいみじき區別も所により時により見失はれ混同される。例へば生産過程に於ては生産物は飽くまで素材に即して考へられるが、流通過程に於ては一躍價格が導き入れられ、これを中心に論義が展開され、使用價值の増加が或場合は交換價值の増加の姿で把握されることさへ見出されるのである。勿論これは封建制度より資本主義經濟への轉換期を背景とせる彼の社會的生の必然的反映とも考へられる所で、その根本思想が尙封建的使用價值的素材的概念を離れざると共に流通過程に於ける華々しき資本の飛躍に眩惑され、いつしか使用價值の概念を脱出する形となつてゐるのであらう。

尙ケネーが右の説をなすに當つて屢々加へられる若干の俗論がある。これに對してはケネーは「H氏とN氏の對談」(“Du Commerce” 或は “Sur l'er Travail des Artisans”)、或は「H氏の覺え書への回答」[Montandouin 氏批判]等に相當明快に答へてゐる所であるが、今その主要なる批判の二、三を見るに、(1)商人の利潤を獲得するは一種の生産ではないか？ (2)財に賣上價値を與へ富の性質を附與するは生産と云ひ得ないか？

(1) に就いてはケネーはもうける (gagner) ことを生産する (produire) ことを嚴密に區別することを要すとなし、「もうけること」は一方に失はれる所が他方に渡ること、富の全體的増加には貢獻しないとする。そして後者は「眞の富の増加」であるが、前者は商人が他のものより奪つたものであり、國民の懷中より支拂はれるぬのであり。農民の生んだ所のものより支拂はれるものであり、何等國民の富をまさない。自由競争は商人の「もうけ」を少くするが、それは國民の富の減少ではなく國民の利益に於て現はれる。尤もこの點は上述のケネーの理論より容易に理解出来る。かくてケネーに於ては商人工匠は生産せず自己の生活維持に等しきものを附加するに過ぎず國民全體に對しては富の減少も増加もたらさないが、然らば減少も増加もたらさないものは生産的と云ひ得るか。これは一つの問題となり得る。ケネーに於ては、斷乎斯の如きは生産に非ず餘剩價値の生産こそ眞の生産なりとされるのであつて、<sup>19)</sup>この生産の概念は資本主義機構の天才的洞察として注目すべきである。

19) Du Commerce (Oeuvres, p. 451)

(2) 財に賣上價値を與へ富の性質を附與するから商人は生産的なりとの考へに對しては、ケネーはさう答へる。「價値はいづれの側にも交換の前に存在する、事實交換は何物も生産しない。故に不生産階級はその購買により生産階級から買つた生産物の價値につき生産的でない。生産階級が不生産階級より買つた所のものについて生産階級も亦然り、何故ならば、いづれも同様に購買者であり販賣者であり、相互に同じ交換の條件法則に従ふ」<sup>20)</sup>からと。

ケネーによれば價値は賣買の前に存在するもので不生産階級の生産階級に支拂ふことを以て、或は賣上價値を保證することを以て、これが生産されるとするは誤であつて、不生産階級の支拂ふ資源は結局は生産階級の生んだものに過ぎぬと考へる。こゝに二つの問題が可成り明かにされてゐる。即ち流通過程の生産性を主張するは、有用性と生産性を混同せるもので、ケネーは商業は財に富の性質を附與する關係上有用なものであるが、例へば道路や大洋は生産物運搬に必要なも生産的でない様に有用性と生産性とは別問題である。<sup>11)</sup>「賣上價値を保證する」こと「富の性質を附與する」ことは決して生産ではない。このことからケネーの考へは更に價値或は餘剩價値の生産の問題と實現の問題が可成り明白に區別されてゐることを見る。我等はこの點同じ姿をマルクスの主張の中に見出す。尤も價値を抽象的社會的勞働の中に見出したマルクスはケネーとは異り工業に於ても生産性を認めるが、商業に於ては斷然之を否定し「商人なるものは力の無用な消費を減少せしめ又は生産期間の遊離を助ける一機械」<sup>22)</sup>であると考

20) Quesnay, Reponse au mémoire M. H. (Oeuvres, p. 389)

21) Du Commerce (Oeuvres, p. 451)

22) Marx, Das Kapital, Bd. III. Teil. II, S. 233.

へ、商業は價值餘剩價值を生産するものに非ず、實現するものであり、商人は生産物を價值以下で買入れ價值通り消費者にうるものであると考へるが、この考へ方の萌芽を既にケネーの中に見出すのである。

**商業の機能** 以上我等はケネーが餘剩價值の成立を生産過程に於て見出し、これは流通過程に於ては實現されるに過ぎず、商業は何等生産的のものに非ずと主張することを知つた。然しケネーも云ふ如くそれは決して輕侮の意味ではなく、軍人裁判官の如き高き職業も不生産的なもので、ケネーも亦商業の有用性を決して見逃すものに非ず、否寧ろその有用性を高唱せるものであり、たゞ「必要なること」と「生産的なること」を嚴密に分つたまでである。<sup>23)</sup> されば前述の如く、國民の福祉に決定的に關係する生産物の豊富と高價は、商業により始めて齎さるゝ所であり、ケネーによれば「消費及び商業は生産物の賣行及び賣上價值を支持する」(原則十三の註釋)<sup>24)</sup> としてこの「賣上價值なかりせば最早や消費と再生産の間には關聯も規則もない、價格は消費される富より人が引出す等價值の物により再生産し得る富の尺度である。かくて價格の増減は國民の年々再生産する富の多少を決す」<sup>25)</sup>ることとなる。されば商業の機能は先づ財に賣上價值をあたへること、これは必然十分なる農夫商人工匠への前拂を含んでゐる關保上王國の繁榮に資すること大である。商業なくんば賣上價值を缺き農民は賣り得ざる豊富更には缺乏せる高價に悩むこととなる。蓋し商業の唯一の機能は、重商主義の見解では、國家に金銀を招來するにありと考へられて來た。ケネーに於ては「金錢は商業の目的に非ず」<sup>26)</sup>と明言され「商業の利益は他國民よ

23) Reponse au Mémoire de M. H. (Oeuvres, p' 395)

24) Oeuvres, p. 348.

25) Hommes, p. 51.

26) Hommes, p. 48.

りの金銭の奪取に非ず」<sup>27)</sup>と述べられ、かくの如き金銭は必然享樂し消費し得る眞の富に代へらるべきもので、商業の本質的機能は貨幣の商品化にありと説かれてゐる。ケネーによれば「金銭の源は生産物の夥多と良價である、金銭は商業なかりせばそれ自身生産的な富に過ぎず」<sup>28)</sup>國民の富裕は金銭の多寡により定まらず、兵の富は金銭に存せない。「商業により、國民は彼等の餘制を相互に賣買し、購買により彼等の富を交え合ふ。眞の富は消費し年々生れるそれである。何故なら眞の富は消費され、求められ、賣買され、収入を形成するから」<sup>29)</sup>

これより二つの結論が導かれる。第一はケネーに於ては生産者としての農民の見地と共に消費者の立場が一度顧慮されてゐることである。これはスミスが、「消費が總ての生産の唯一の目的である」<sup>30)</sup>とせし見地と對比して非常に興味深い所で、ケネーの所説が單に農民の利害のみを顧慮して消費者のそれには一顧も觸れざりしと主張する人の説には賛同し得ざる所であつて、<sup>31)</sup>上述の如く彼もスミスと同じ消費されるもの享樂されるものを眞の富と見做してゐるのであり、これ貨幣のみに執着した重商主義と對比しての彼の見解の特徴であり、商業の機能は商品の貨幣化に非ず貨幣の商品化により完成さると見し如きも極めて興味ある見解と云はねばならぬ。第二に彼の見解では重商主義と異り—尤も時としては外國商業は生産的である等の脱線もあるが—外國貿易が國內商業と同列に引下げられてゐることを見出すのである。否、時には「一國民の富の状態を判斷し得るは國內商業外國貿易特に國內商業の状態によつて

(註一)

27) Hommes, p. 49.

28) Hommes, p. 26.

29) Hommes, p. 48.

30) Smith, Wealth of Nations. (Cannan), Vol II. p. 159.

31) 山口正太郎著、重農學派經濟學 153頁。

である」とのべ、國內商業の方で一國の富との關係深きこと等も示されてゐるが、ミスに至つては國內商業は消費生活との關係深きため外國貿易より重要なりと述べられてゐる。<sup>32)</sup> 即ち重商主義に於ては商業は専ら致富の手段と考へられた關係上、外國貿易が重んぜられたが、ケネーに於ては國內商業も外國貿易も同價値の交換を基調とせるものであり、外國貿易の場合と雖も販賣のみの購買といふ如きは考へ得られず、販賣者として得る所は購買者として失ひ、交換の中には何等の餘剰も成立せず、國富の増加に直接的に貢獻せざること國內外の商業を問はないとしたのである。たゞ間接的には外國商業の存在は穀物の販賣を容易にし、賣上價値を得しめ、「價格を釣上げる」故有用なものと考へる。尙ケネーの考の中には財に賣上價値を附與し、W-G の過程を促進圓滑化する外、價格の均一化がもたらされ變動が除かれ、場所的量的過不足が調節されることを擧げてゐるのは、<sup>33)</sup> 後の商業機能學說の發展のため注目すべき所である。<sup>(註二)</sup>

註一 ケネーは、「Hommes」に於ては屢々「商人は外國との商業の獲得せしめる良價により豊富に貢獻する限り生産的階級の中に入れらるべきである」とか「國內商業に限られた商人は嚴密に云へば何物も生産せず、國民に盡し、國民により交拂はる」と云ふ Ervneue Bauer の註によれば

Nous voilà revenus au principe de stérilité du commerce, mais il est à remarquer 1° que l'auteur dit "sigoureusement parlant, 2° qu'il parle ici du commerce intérieur et non plus, comme à la page 59, du commerce extérieur. Il result donc de ces deux passages une distinction entre le commerce

32) 拙稿、商業機能學說の發展 拙稿、重商主義の國內商業統制

32) Note sur la Maxime XVI. (Oeuvres' p. 352)

33) Hommes, p. 60.

34) Hommes, p. 74.

extérieur qui est productif, si du moins le négociant est bien intentionné, et le commerce intérieur qui rigoureusement parlant est stérile. Cette distinction, disparue de l'oeuvre définitive de Quesnay, (V. notamment Dialogue sur le commerce), se trouve encore dans lettre de Quesnay à Mirabeau que nous avons publiée dans *l'Economie Journal*, mars 1895.

註二 小賣商業の機能については次の如き興味ある觀察をなしてゐる。ケネーの時代農村を逃れて都市に走るもの多く、爲に都市の小賣商業の数は非常に過剰となつたらしく、彼も「商人の數やもうけの量は、非常に不確定で、一定の秩序に従はないから、あらゆる種類の小賣商人は限りなく増し得ることが出来る。かくて益々家族が多くなれば、益々この商業は高價となり社會の負擔となる」<sup>35)</sup>とのべて、小賣商業に於ける競争の過剰は良價をもたらず、國民の負擔となる程度に價格を高めることをのべてゐる。而してかゝる小賣商業増加の原因としては、當時農村は穀物取引の自由なく、税重く、貧窮化せし故、小資本を有するものは比較的負擔の軽い都市に出てこれを營むからであり、この小賣商業に對する批判としては「暮し向きのよい市民、就中、公衆からのみ利得するに過ぎざる、而も都市に非常に多數なる小賣商人は國民には荷厄介なのであつて、これらの市民は彼等の子供の爲には、保護され尊敬されてゐる農業において都市におけるよりも更に堅實にして卑賤さ一層少き生活を見出すのである。農村へ連れ歸れる彼等の富は耕地を肥やし富を増加し國家の繁榮及び勢力を保證する」<sup>36)</sup>とのべてゐる。これは彼の小賣商業論の一端であるが、今日のそれより見て大體正しきものを擷んで居り特に今日都市小賣商人の過剰を訴へる聲喧しき折柄ケネーのこの主張の中にも亦聞くべき何物かがあり得ると思ふ。尤も社會的背景は異つてゐるが。

35) Hommes, p. 74.

36) Note sur la Maxime XIV (Oeuvres, p.351)

こゝで問題は、私が先の論文に、<sup>27)</sup>「ケネーは屢々生産物の高價の必要を説き商人の價格釣上機能を強調するが、その論據は外國貿易に有利であり農業を活氣づけ農業の純收益を増す爲であり。これは結局政府收入賃銀を増し、社會一般の利益となると考へるが、農業の利益即社會利益觀はこゝにも見られる」と云つた言葉にある。久保田教授はこの言葉を指して、次の如く云はれる。

「之れ全くケネーの高價論に關する無認識を示すものに他ならぬのであつて、後に尙詳述する如く「生産物の高價の必要」と「商人の價格釣上機能」とはケネーにあつては全く相反する」

「堀學士が恐らく生産物の高き價格の必要と同列に置きたるが如き「商人の價格釣上機能」に於ては「彼（商人のこと）の個人的利益は國民の利益と相反す」と明記されてゐるのである。只事情を全般的に通觀すると、生産物の最初の賣上に於ける可能なる限りの高價は巡り巡つて結果として商業をも活潑にさせて「商人の利得の總額」（個々の商人の利得ではない。全商人の利得の總額である）が増大すると言つてゐるのである。「商人の價格釣上」は實際には試みられる事は後述の如くであるが、それは茲で説いてゐる「賣買價値の釣上げ」ではないのは勿論であるし、又それと同列に置かるべきではない。だからケネーは其の第六考察の終りに「商人は決して價格も商業の可能性も生ぜしめない」と書いてゐるではないか——、其の場合の「價格」こそ吾々の今問題としてゐる賣買價値なのである。然し乍らケネーの經濟價値論従つて富論に關する認識不足は獨り新進堀學士に止まらぬ。フランス經濟學界の長老たりし故チイ

ド教授も亦同様にケネー經濟價值論の理解に於いて混亂に陥り、遂に“On ne le comprend plus”と叫ぶに至つた。従つて氏によつてケネーの「高價論」が徹底的に明徴されてゐないのも敢て不思議ではない。本稿の讀者は一應デイドの所論を併讀されん事を切望する」と。

そこで問題は三つの點にある。

(イ)「商人の價格鈞上機能」と「生産物の高價の必要」が全く相反するか？

(ロ)「商人の價格鈞上機能」の概念は果して久保田教授の解する如きものか？

(ハ)デイド教授は果してケネーを誤り解したか？

先づ(イ)を問題とする。この點に關する久保田教授の批難は全く私の云ふ所に對する延いてはケネーの云ふ所に對する、「認識の不足」より來るものと云ふ外はない。「ケネーの文献の涉獵不足？」を、小生に對し責められた教授に私は更めて「ケネー文献の精讀」をお願いしたい。私の解釋はかうである。ケネーによれば生産物は賣行なくんば無價値に陥る。若しその價格が根本價格以下となれば損失に變はる。然るにこゝに自由商業が介在せば生産物は賣口を得、價格は高まる。自由競争が完全に行はるれば價格は良價に落着く。「良價」は根本價格以上價值通りの價格に落着いた状態である。この良價の中には經費農工商の収益も含まれてゐるわけで、生産物は商人の介入により賣口を得て、どうしてもこの良價の點まで引上げらるべきである。これケネーの「生産物の高價の必要」であり、「商人の價格

釣上機能」である。久保田教授がこの間に何の關聯も認めず、相反するものであるといふは恐らくケネー解釋の未熟より來るものであり、その必然の結果として生ずる教授と小生との間の「價格釣上機能」「高價」の概念の相異より來るものであらう。次に教授の「價格釣上機能」の概念を問題とする。

(ロ) 教授の解釋では良價は最初の人の賣上價値に關聯せる問題で、これの高きを望むが「高價の必要」であり、商人は更にこの良價以上に價格を釣上げて消費者に賣渡す、これが「商人の價格釣上機能」である。故に商人の利益は社會の利益に反する。これが教授の所説であるが、私によれば、これは恐らくケネーの所説といふよりも寧ろケネーの批判の對象としたものであつて、ケネーの如何なる「文献を涉獵」しても、かゝる意味にしか解釋され得ざる所の一言の文句も見出し得ざるのみならず、商業は不生産的にして價格は當に買入及賣上に先立つものであり、「商人は決して價格も商業の可能性も生ぜしめない」ことを力説してゐる。私は寧ろこの最後の言葉をもつて、教授に返言し得るを、最も幸とすることは——手數を省く意味にて——先にも述べた如くである。

商人の利益は國民の利益に反すとの語も教授の説を何等強めるわけではなく、寧ろ商人が良價以上に高めて賣るならば「商人の利益」は「國民の利益」と一致するわけであるが、ケネーの見る所に依れば商人は農業者の生産せる收益の割前にあづかるのみで、社會的費用に屬する故に負擔であり、何人の商人の手を通づるも寧ろこの費用——即ち農業者の生産より取去られる部分をますのみで「富の生産ある

事なき貨物の置換、諸掛の増加に過ぎないことを注意すべきである」。

(ハ) デイド教授は私と共にケネー解釋を誤てりと久保田教授は揚言せられるが、私を以てせば流石デイド教授は「フランス經濟學界の長老」だけにこの點を——假令漠然たる形に於てはあつたにせよ、視察してゐた様である。これはデイド教授の次の言葉を引用すれば、久保田教授竝に讀者の御了解を得られるものと思ふ。デイド教授は云ふ

「しかし、重農主義者等は、自然財及び小麦そのものも、工業生産物と全く同じやうに、市場における價格の法則をうけること、そしてその價格はあまりに低かつた場合には純生産物が消失してしまふことそれらを感じしない程盲目ではなかつたのだ。だがその場合、どうして土地は猶且つ價值を生産したと言ひうるか？ 又如何なる點で、農業生産物の價值は工業生産物のそれと異なるか？ 重農主義者はまだこれ以上には了解しなかつた。恐らく重農主義者たちの思想は『善き價格』換言すれば生産費以上に一の利餘價值を含んだ價格は、自然的秩序の一の正常的結果であると思つたであらう。價格が生産費の水準まで下落したとしたら、それは自然的秩序が破壊されたのであり、従つて自然價格が消失したとしても何等驚くことはなかつた筈である。ケネーの謎のやうな次の文は、疑もなくこの意味のことであらう。「豊富と安價は富ではない。缺乏と高價は貧である。豊富と高價こそは富裕である」<sup>33)</sup>

デイド教授は又ケネーが自由商業が價格を高價ならしむと云ひつゝ他方で平等ならしむと述べてゐる

のを對立的に擧げてゐるが、<sup>36)</sup>これは價值＝良價＝生産費＋餘剩價値の考へ方に於ては何の不思議もない所で、自由競争のもとに於ては高低相平均されると共に、フランスに於ける如き今迄輸出を缺く國では價格が高めらる——價值まで高められるは必定である。デイド教授が良價＝生産費＋餘剩價値と考へしは上述の引用でも明かであるが、既に餘剩價値 (Plus Value) なる言葉を用ゐる以上、更に價格が低いと純生産物が消失することを説いてゐることと併せ考へて、これを純生産物のすべてを含んで「土地の價值」通り賣らるべきが最も自然的秩序に合するとの解釋を豫感してゐたものと思はれる。この高價の限度を明示しなかつたことは——即ち價值までの高價——はその解釋に種々の誤解を生む所であるが、このことは彼の文献を熟讀せば容易に汲み取り得る所である。

以上私の解釋を簡單に表式で示せば次の如くである。 價值＝良價＝最初の人の買上價値(根本價値)

$$+ \text{離業者の收益} + \text{商工業者收益} = \text{生活資料} + \text{純生産物} + \text{農業者の收益} \\ \text{商工業者の生活資料}$$

ケネーの表現をその儘簡單に示せば右の如くであつて、自由競争のもとでは、商人は價值よりも自己の生活資料だけ低く商人より受取り(最初の人の生産物の賣上價値)、これに商人(工匠)の生活資料を附加して——これは農業者の生産せるもので先に農業者より受取つてゐる——「良價」で消費者に賣り渡す、これで最も自然的秩序に合した状態である、これがケネーの本意らしく、恐らく商人の自己の生活資料を商品に附加することが——個別的に見ればそれだけ價格を高む——多くの混亂を、錯覺的理解を引起

39) Gide Histoire, p. 33.

す原因であらうが、社會的には不生産階級は生産階級より受取つたものを附加するだけで、別に新しい富を作るものでないことはケネーもしばしば斷つてゐる所である。

**自由放任論の性格** ケネーは生産物の豊富と高價の必要を説き、商業の介入がこれをより容易に實現せしむるものなるを説いた。問題はこれは如何なる社會的條件のもとに於ける商業であるかにある。彼は自由放任のもとに於ける商業こそこの機能を最もよく果す所以なりと考へた。重商主義時代商業が甚しき拘束制度を受けたことは先に述べた如くである。特權獨占は自由商業を阻げた。ケネーの排する商業はかゝる意味の商業であつて、かゝる制度のもとに於ける商業にては、農民は必然的廣範圍の販賣を持ち得ざるわけで、高價と豊富は到底望まれず、却つて彼等の避けんせし飢饉をすらもたらすと考へ、曰はく、「何故なら小麦の耕作は良年に國民の生活資料だけに限られる故、國民は不作の年に應じ得ない。すべてこれ等の混亂は商業を制限づけ耕作の自由を制限づける規則の結果である」と。彼の商業自由の主張は彼の論文の各所に、極めて強い口調で述べられてゐる。

「商業の完全な自由を保有すべきこと。何となれば最確實なる、最正確なる、そして國民及國家に最有益なる内國商業及び外國貿易の政策は競争の完全なる自由にあるからである」(原則二十五)。「農業國民の繁榮は何に存するか。収入及び租税を永續し増加する爲の大前拂に、自由にして容易なる内田商業及び外國貿易に、不動産の年々の富の享有に。収入及び租税の金錢による豊かなる支拂に」(原則第十三)

註釋)。「諸君の收入を形作る賣上價値を保證するものは消費と販賣と及び外國商業外國貿易の容易及び自由とである」(原則二十六の註釋)。

「道路の修理と運河、河海の航行とによつて生産物及び製造品の販路と運送と容易ならしむべきこと。

何となれば差引の諸掛を減すること多ければ多いほど耕地の收入を益々増加するからである」(原則十七)。

「政府は商業を榮えしめ、工業を擴張するためには收入の増加に注意するより他の方法はない。何故なれば、商人工匠を呼びよせ、彼等の勞働を支拂ふは收入なればなり。故に木の根本を耕さざるべからず、彼等の注意を枝に限るべからず、枝をなるがままに任せよ、然し生産と増殖のために必要なる汁を與へよ、土地をゆるがせにするな」(穀物論)。

我等はこれ等の主張より彼の商業に於ける自由放任論の性格を見るに、要するに彼によれば自由は彼の目的とする高價と豊富に資する爲であり、生産は實現を伴はざれば全からずとの考へが根柢に横たはつてゐる。而してこの實現を全からしむものが自由商業であり、これは賣上價値を保證し、生産物を「高價」の状態に歸せしむものとする。この點多くの自由商業論者の自由競争は價格を引下ぐとの主張より分つて彼を特徴づける見解であり、これは當時の佛國の輸出禁止の状態に於ける事情が反映せるものであるが、尤もこの場合の高價も絶對的高價ではなく、價値通りの販賣への主張であることは先に力説した

如くであり、然る限り、スミス以下の自由商業論とこの點では似通つた性格をもつ。而して彼はこの自由への手段は一は制度的の自由で政府の個人的活動への不干渉であり、二は自然的障害よりの自由で政府はかゝる障害を除くべしとし、その結果は生産物中経費に歸する部分は少く餘剰が多くなつて來ると考へる。こゝに必然問題となるのはかくして自由が得られたとするも果して消費者が存在するかの點である。ケネーは資本主義の初期にふさはしい如く答へる。即ち缺けてゐるのは消費者でなく消費であり、消費者は至る所缺かない、自由商業が實現し、農業生産が發展せば消費は増加し、かゝる憂は一掃さるべしとする。ケネーは自由商業にすべての問題を結びつけてゐることは興味深い所で、たとへば労働者の怠惰の如きも、この穀物商業の不自由より齎されるとし、「壓制されたる農夫の怠惰の眞因は賃金のあまりに廉きこと及び生産品取引の不自由が食料品を無價値に陥らしめたる」<sup>41)</sup>によるとし、重商主義の農民は怠惰なれば勤勉なりの思想に對立して、安易にして富裕なれば勤勉なり而して富裕は商業の自由より齎さるべしとの論法で進む。かくて自由競争の結果は價格は彼の所謂「良價」に歸するが、これは一つの永續的價格であり、その中には農工商の正當な収益(商工はケネーによれば生活資料)が含まれてをり、これは最も自然的秩序に合した状態である。尤もケネーも反駁せる如く(H氏N氏の對談第一「商業について」)「自由競争に於ては商業は不生産的であり有害である」との説があるが、斯くの如きは商人の獨善的な考へ方であつて、成程自由競争に於ては、價格の變動は少く、その開きも少くなる故、

市價の開きを利用しての商人の利益は少くなるわけで、商人がこれを指して云ふのであるが、「もうける」ことは「生産する」ことではなく、自由競争の阻害されて居る時の商人の「もうけ」の大なるは何人かの損失に於て「もうける」のであつて、商人の利益であつても國民の利益ではなく、この意味で商人の獨占特權は國民の利益に最も害ある所であつて。自由競争は國民の利益に於て商人の「もうけ」を引下げることとなる。<sup>42)</sup>かくて國民大衆より見れば假令商人の利得は減するも、平均價格が支配し、過不足が調印され、始終一定の「良價」を享樂せらるゝこととなる。ケネーのこの思想の中には勿論總價值||總價格より來る必然的結論ではあるか、<sup>43)</sup>市場價格の高低が上下平均されて、生産價格に歸するとのマルクスの考へ方(平均概念)の萌芽とも云ふべきものが見出されるは先述の如く、注目すべきである。

そこで問題はケネーの自由放任論の特徴であるが、これが重商主義の國家的統制に對立して一應個人的自由の主張であることを認めるとして、果して國家は拱手傍觀すべしとなし、これが務めを何等認めなかつたか。私はこれに對し否と答へねばならぬ。ケネーの主張はかうである。人間の社會には自然的秩序が支配し、現實的秩序はこの自然的秩序に最もよく従ふとき、人類の幸は最も大である。人爲の法はこの自然的秩序に當然従ふべく、これを成文化せしむべきものに過ぎず、國家の任務はこの自然的秩序のより滑かなる支配を監視すべきである。従つて農業のみは純収益を生み、これを以て商工業を養ふ故に、農業は自然的秩序に最もよく合するものであり、これが繁榮を妨げざる様十分保護せらるべ

42) Du Commerce (Oeuvres, p. 454)

43) Du Commerce (Oeuvres, p. 452)

までであるが、商工業はこれを自由に放任すべく、否自由を妨げざる様監視すべきであるとする。曰はく「經濟的統治は生産的支出と自國農産物の商業とを保護し及び不生産的支出をそのまゝに放任する事のみ問題とすべきこと」(原則第八)。

これに對してかう云ふ非難がある。ケネーは先に商工業は不生産的であり、最も悪いもの、國民の負擔と考へた。然らば何故に必然その結論はこれに對する禁止又は制限を以て、自然的秩序に合すると考へないか。何故なら自然的秩序は國民に最も有利なものだからと。この疑問は故チイド教授も主張し、わが故山口教授も述べてゐられる。<sup>45)</sup> 成程商業は國民に有害である。然しケネーも云ふ如くこれを自由に放任せば、商人の市場價格の變動より來る「もうけ」は國民の利益に於てより少くなるわけであり、この點に於て自由放任はより自然的秩序に合するわけであり、若し商業の自由を妨げんか、生産物は賣上價值を缺き、農民は窮乏し、農業の繁榮を以て自然的秩序に依存するとのケネーの考へより見ればこれを顯現する所以ではない。チイド教授は、ケネー一派の外國貿易の自由の主張を以て、こは國內商業が當時障害のもとにあり、これへの自由を考へた結果、「自然的秩序は、誰でも自分の好むものを賣つたり買つたりする自由を含み、國境の區別を知らないから、國內と國外の差別なく」自由貿易の主張となつて現はれたのであると云ふ。

兎に角ケネーの主張は商業自由の妨害されてゐたのに對する一對立物であり、それは封建制度を脱し

44) Gide, Histoire, p. 32.

45) 山口正太郎、前掲 160頁

45) Gide, Histoire, p. 33.

今やその原理を獲得し勃興の途次にありし資本主義の社會發展途上の必然的要求を反映せるもので、この背景に照してこそ、始めて表面尙農を説きつゝ、變度、自由移住により商工業の發展を助長せる如き、或は農業單一課税により農民により重き負擔を主張せる如き矛盾も理解出来ると思ふ。

重商主義は封建制度よりの自由を獲得した。重農主義は先にも述べた如く、國家的統制國家至上主義より個人の自由を獲得したのであつて、同じ自由を高唱しながらも、重商主義の自由とケネー一派の自由とはその内容を異にすることは、私も先に指摘した所である。<sup>47)</sup>こゝに問題はこのケネーの自由が果して然らばスミス、リカード等に見る自由とその概念を一にするかの點である。私はこの點でも否定的回答を示さねばならぬ。第一、ケネーの自由は極めて、現實的、具體的自由である。例へば外國貿易に於ても輸出の自由を説く。然し輸入の自由については口を緘してゐるが如き、その一例であり、これは當時の佛國の事情の然らしむる所であるが、この點はチュルゴーに至り始めて説かれた所である。こゝにスミス以降特に抽象學派と難ぜられるリカード一派との自由の概念の相違が見出される。第二、ケネーの自由は背後に自然的秩序の支配を認め、これが攝理への順應を説く自由である。即ち自由放任は自然的秩序への一任を意味する。然る限り或意味では自然的秩序の専制主義を認めることであり、重商主義の國家におき代ふるに自然的秩序による統制を認めることとなるのである。これケネーが一面自由放任を説くと共に他面政治的専制主義を謳歌せる所以でもある。デイド教授も引いてゐる如くケネーは「一般原則」<sup>48)</sup>

47) 拙稿、重商主義の國內商業統制

48) Gide, *Histoire*, p. 46.

第一で、主權は唯一にして社會のあらゆる個人よりも、又特殊利益のあらゆる不正企業よりも優越なるべきことと云ふが、かゝる矛盾も彼の自由の概念より見れば必然的結論でさへある。第三、ケネーを中心とする重農主義の理論は重商主義の國家主義に對蹠の意味で、市民主義を代表する如く説く人がある。<sup>46)</sup>私は必ずしもさう考へない。國家がケネーの頭から忘れ去られてゐないことは重農主義の人々何等異なる所はない。寧ろ彼の所謂自由主義がより國家に有利なりと考へたからであり、農は國のもとであり「農貧しければ國貧し」く、この農の貧しき原因は穀物商業の拘束にあり、こゝにこれへの拘束の徹廢の主義とをつて現はれたのであつて、彼の自由論尙農論の主義の背後にはフランス國家の觀念が消え去つたわけではなく、寧ろ華かな重農主義の蔭にひそむ豊沃なるべき佛國農村の荒廢人口の減退に慨然として立つたわけで、一部の人の考へる如く彼を國家主義と對蹠的地位におくのは妥當ではない。寧ろ辨證法的な發展形式を當嵌めるなれば、重農主義の「民を考へざる」ことに對するアンチ、テーゼとしてケネー一派の民福論を對立せしむべきで、國家は常に兩者の惱中を離れず更に私を以てせばケネーを單なる市民主義者とするは之を解せざるものにして、寧ろ、好むと好まざるに拘らず、彼こそ國民主義、經濟學の先驅者であり、これをスマミスが發展せしめたと見るのがより妥當である様に思ふ。

以上大體私はケネーの價值論を出發點として、その商業理論並に政策論の概要を述べ、これに對する私見を展開し、併せて久保田救授の批判を吟味して來た。

これを要するに、ケネーの學説は資本主義が漸く封建制度より抜け出し、未だ自己固有の姿を見出し得ざりし時代を背景とせるだけに、これを内在的に見れば、極めて多くの問題をのこし、その政策論も彼の見出した理論と相矛盾せる節々も決して少くはない。蓋し實際的要求は常に理論に先立つたものであつて、ケネーも亦矢張この要求にうながされながら、而も理論をこの要求に應ぜしむべく十分展開し得ざりしわけで、片足で封建經濟を踏みながら片足を資本主義經濟の中に突込んでゐる如き姿をさへ時時見出すのである。政策論で商工業の自由放任農業單一課税を説きながら、理論で偏農の觀念を脱し得ざりし如き、流通論で貨幣價值を導き入れながら生産論で素材使用價值より離れ得ざりし如き、商工業の不生産を説きながら、時々「嚴密な意味では」等の言葉を使ひ或はこれが生産性をさへ失言せるが如き、その一二の現はれと見ることが出来る。然し餘剩價值の發生も生産過程に移して考へ、或は流通過程を生産過程との必然的聯關に於て考へ、尙農業をもつて價值充實にその機能を認めし如き輝ける資本主義機構の分析に於けるその功績は、たとへ内在的には多少の矛盾を拘擁するとはいへ、資本主義商業理論の研究上に於ても到底見逃し得ざる多くのものをもつのである。

## 二、ケネーの商業學說批判

以上私は私の解するケネーの商業學說の概要を述べ、それに對する私見を論述して來たが、ケネーの

かゝる商業學說に對してはその後多くの批判を生んだ。つぎに私はこのケネー批判を主として、スミスマルクスに就いて考察し、それへの私見を述べておきたい。

**スミスの批判** スミスの見解に於ては、重商主義が商業のみに、重農主義が農業のみに見出した生産性を、農工商の労働一般に於て見出す。即ちスミスに於ては價值は、ケネーや重商主義者の如く、手に觸れ目に見得るものではなく、労働量といふ一つの一般的抽象的なものに還元されてゐるのであつて、然る限り必然、農業は勿論、商工業も生産的なものとなるわけで、彼によれば商品の自然價格（大體價值と同意義に用う）は勞賃利潤地代即ち  $v + m$  よりなり、不變資本に當るものは總て  $v + m$  に分解されることとなすが、この  $v$  と  $m$  の中には單なる農工の労働のみならず、流通過程の労働も含まれてゐるわけで完全な自由競争のもとでは價格は自然價格に落着くと考へる。私の解釋をもつてせばケネーの「良價」は大體スミスの自然價格に相當する概念と考へるが、これは暫くおき、スミスに於てはケネーの所謂自然的秩序といふ如き形而上的考へ方が排せられ——「見えざる手」をこれに相當するとも考へらる——利己心に基く自由競争の結果はこの自然價格に可及的に近附くとし、自由商業の介入は價格の變動を少くし、穀物の過不足は調節され、消費者は安定價格をたのしみ、生産者は商人に賣り付けて直ちに再生産に着手することをえ、都市は農村に材料を、農村は都市に製品を仰ぎ、極めて調和的な國民全體の利益がもたらされると考へる。ケネーは商人の利益は國民の利益と相反すと考へたが、スミスに於ては自由競争のも

は商人の利益と國民の利益と相反せず、商人の利己心こそは寧ろ飢饉災危を避くる唯一の緩和劑なりと  
 とで考へ、かゝる見地より重農主義の學説を批判する。

先づスミスはケネーに於ける商人工匠が自己の消費額を再生産し資本を存続せしむるも尙不生産的となすを難じ、有名な次の比喩を以て批評する。即ち、「吾らは一結婚を目して、假令それは父母に代る可き一男一女しか産せず、人類の數を少しも増加する事なく、單に従前と同一數を繼續させたに過ぎないとしても、無生産的（不妊性）又は不生産的とは呼ばないであらう<sup>51)</sup>」と。この意味から彼はケネーの不生産の概念を難じてゐるが、これはデイド教授にも引用され、尤な批判とされてゐる。然しこの批判は夙にケネーの豫想せる所でケネーは「N氏H氏の對談第一」に於てかゝる批難を豫想して答辯して居り。彼は單に「失はず」「得ない」ことを以て生産的とすることに與し得ずとして居る。これによれば、<sup>39)</sup>

H氏「損せないことはもうけるのではないか？ もうけないことは失ふことではないか？ これ等の表現が同意語であることに同意せらるゝなれば議論は止まる。何故なら商業は固に損失を避けしめることにより國を富まし、それにより不生産的でないこと云ひ得るから」

N氏「わが友よ、文法學者は概念の正しい陳述は殆んど同意語を許さない。而してそれを理解せしめるために、彼等は君に云ふだらう、若し人が君の同意語を用ふるなれば失はずもうけないことは又失ひも  
 うけることを意味することを承認せねばならぬと。若し賭博者が損せずもうけずに賭博より身を引けば

51) Smith, Wealth of Nations. Vol II P. 173.

52) Gide, Histoire, p. 29.

53) Du Commerce (Oeuvres, p. 451)

無關心に人は云ふかも知れない、彼は失はずもうけ且損せりと。この最後の表現は初めのと同じ意味だらうか？ もうけたより多く損したかどうか、損したより多くもうけたかどうかを知らずにおかないではないか、それをわからすために説明する必要はないか、それを説明するため失ふといふ語の眞意もうけるといふ語の眞意に従ひ、必然的にこの兩語は同意語にあらざることを認めることは必要ではないか。

君の用語に従へば盗人により盗まれない限りいつも人はもうけると云はねばならぬ。又この種のもうけは非常に數多くなり得る。然し彼はより豊かになつたか。かゝる論辯はこの語の濫用のみ存せないか」

我等はスミスの重農主義批判の第一の點はこのケネーの架空の人物H氏へのN氏の言葉を以て返すことが出来ると思ふ。ケネーの考へではかうである。農業は所謂「純収益」を生む、商工業は自己の生活資料だけしか附加せない。純収益を生む農業は生産的であるが、後者は不生産的である、スミスに於てはさうではない。後の場合も少くも自己の生活資料だけ材料に附加する。故に不生産的ではない。これがスミスの考へ方であるが、これでは、結局は價值を生産する労働が生産的であるといふ表現に歸する。我等は生産不生産の意味も社會形態經濟關係より離れて考へ得ないことを知る。然る限り資本主義機構を前提とする限りケネーの考への方により現實への妥當的概念を見出すのではなからうか。尤も我

等はスミスも他の場所では、「消費物の全價值を利潤を添へて再生産する」<sup>54)</sup>ものを生産的勞働なりと規定し、「價值を生む」のではなく「餘利價值を生む」勞働を以て生産なりと規定してゐるを知る。この場合はスミスも資本主義機構の正しき姿を掴んでゐるとも云へるが、前例の場合では恐らく重農主義批判に急にして正しき姿への反省を忘れたのであらう。而もスミスは又一面ではこんな事も云つてゐる。

「三子をあげる結婚は只二子を生むに止まる結婚よりも明かに一層生産的である様に、小作人及農業者の勞働は商人工匠製造者の勞働よりも一層生産的である事は明かである。しかし此一階級の生産上の優越は、其他の階級を無生産的又は不生産的とする筈はないのである」<sup>55)</sup>と。これはスミスの重農主義への接近を示してゐる。そこには我等がケネーに加へた非難を以てこれに充てることが出来る。生産の順位の後には重農主義的な素材使用價值の幻影が残つてゐる。次にスミスの次の批判にうつる。彼は続ける。「工匠製造者及商人を家内の僕婢と同一視するは、此理由を以て、全然不當と思はれる。家内の僕婢の勞働は彼等を維持し使用する元資の存在を繼續させぬ。彼等の生活維持及び使用は全然彼等の主人の費用負擔に於て行はれる、且つ彼等の完成する仕事は此費用を償還する性質を有たぬ。此仕事は正にその完成の瞬間に於て大抵消滅する勞務に存し、彼等の賃銀の價值及生活維持資の價值を回收し得る何等かの賣り得可き商品にそれ自身を固着又は實現しない。之に反して工匠製造者及商人の勞働は當然ある左様な賣り得可き商品に固着し具體化し實現する」<sup>56)</sup>。スミスの云ふ所はかうである。工匠商人の勞働は

54) Smith, Wealth of Nations. Vol I. p. 322.

55) Smith, Wealth of Nations, Vol II. p. 173.

56) Smith, Wealth of Nations, Vol II. p. 173.

「奴婢のそれとは異り、瞬間にして消え去らず、「何等かの賣り得可き商品にそれ自身を固着又は實現」する故生産的である、即ち商品を生産する労働が生産的である。又こんな事も云つてゐる、「收穫後の最初の六ヶ月間に於て、其價值十磅なる仕事を仕遂げる一工匠は同時間内にその價值十磅ある穀物及その他の必要品を消費するにしても尙且つ彼はその社會の土地及労働の年々の生産物に十磅の價值を附加する筈である……しかし若し此工匠に依り消費された穀物及其他の必要品の十磅の價值が、軍人又は家内の奴婢に依り消費されたであらうならば、年々の生産物の中六ヶ月の終に於て存在したその部分の價值は、かの工匠の労働の結果、現實にある所よりも十磅丈け少かつたであらう」と。

スミスのかゝる考への背後に何を見出すか。我等は重商主義が手に取り目で見得るピカ／＼光る貨幣に執着した事を知る。スミスも永續的な瞬間に消え去らない跡を残す労働のみを生産的と云ふ。見方によれば、重商主義が金銀と他の商品との間になすと同一の區別を商品と勞務との間に持ち込んだに過ぎない。従つて結局は重商主義と同じことを云つてゐるのである。ケネーも永續的なもの消費されないものをより生産的となす考への支持し得られないことをH氏への回答の中で力説してゐる。而も尙根本思想に於ては素材使用價值より離れ得ざる部面のあることは私も先に指摘しておいた。スミスも矢張同じ誤に陥いる。重商主義重農主義スミスを通じて素材の影が時々出沒する。こゝに錯誤と混亂が生れる。奴婢の労働はそれだけ社會的缺損を示すが工匠商人は然らずとの考へについてはケネーは前者でも若し

生産者がそれに當つたらそれだけ生産は阻害されることなることを指摘し間接的に生産を助けることを述べてゐるが、この回答は矢張スミスへも當はまる。スミスは又かう云つてゐる。「小作人及農業労働者が節儉なくして眞の所得彼等が社會の土地及労働の年生産物を増殖するを得ざるは猶ほ工匠製造者及商人の場合に於けるが如くである」<sup>59</sup>と。ケネーの云ふ所はかうである。工匠商人は富の總額を増さず受ける分前の中より節約する。農夫は總額そのものを増し得る。その消費は一面再生産を授ける。勿論この場合も生産費を引下げば餘剰となる部分をまし得る。同じく節約を必要と前提するも、この兩者の本質的區別を忘れてはならない。スミスも云ふ如く、生産費の引下は一面技術の進歩によりもたらされることとなり「穀物論」「小作人論」ではケネーの力説せる所である。餘剰價値の生産を絶對的と相對的に分てば、この點より見れば彼は既にマルクスの所謂相對的餘剰價値に相當するものを把握してゐた様である。然しスミスの前例への批判としてマルクスが述べてゐることく、「全利潤を資本家の収入として理解することはそれ自身に於てすでに誤謬である。資本主義的生産の法則はむしろ剩餘労働、即ち労働者のなすところの不拂労働の一部が資本に轉化されることを要求する」<sup>60</sup>。こゝに労働時間の永長等が問題となる。かゝる意味からの資本の成立はスミス同様考へなかつた様である。寧ろスミス同様生産費の引下は越過部分を大にする。これは次年度への再生産を大にするの考へ方に止まる。<sup>61</sup>この點スミスとケネーは結局同じことを云ふ(註)。

59) Smith, Wealth of Nations Vol II. p. 174.

60) マルクス、剩餘價値學說史(マルクス全集 第八卷、298頁)

61) Sur les Travaux les Artisans (Oeuvres, p. 551)

(註) 尤もケネーは次の様なことも云つて居り、消費を再生産に貢献するものとせざるものと分つてゐることも我等は知る。「政府は節約することよりは寧ろ國家の繁榮の爲に必要な方策を考慮すべきこと。何となれば非常に大なる支出も、富の増加によつて過度たらざるに至り得るから(原則二十七)。

以上大體スミスの重農主義批判を述べ、これに對する若干の私見をのべておいた。次に私はマルクスの批判とその吟味に移りたい。

**マルクスの批判** マルクスが價值餘剩價值は生産過程により創造され、流過程に於て實現されると考へるのはケネーの見解に近い。ケネーに於ける「價值分析の不十分」はマルクスの如く價值の實體を社會的抽象的勞働に求めるまでには進展し得ず、従つて使用價值と交換價值を混同し、未だ素材より離れ得ず、従つて消費した使用價值と生産したそれとの殘餘の最も目につき易い農業にのみ獨り生産性を認む。こゝにマルクスとケネーの見解の相違が生れ、マルクスに於て把握された工業勞働の生産性は未だケネーに於ては意識的には主張されなかつた所であるが、而もマルクスも大體ケネーの如く生産物は「良價」或は價值以下で商人の手に亘り、自由競争のもとに於ては、價值通りにて消費者の手に渡ると考へ、商業は不生産的であり社會の費用であり、必要であるが、而も資本主義的再生産過程に於ては必然的なものであると考へた様である。<sup>62)</sup> マルクスはかゝる見地よりケネーへ批判の矢を向けるのであるが、而も彼はケネーの天才的功績を決して見逃しはせない。

先づ資本の分析を問題とする。この點に於ても然し彼は、「ブルジョア的水準内に於ては資本の分析は本質的に重農主義者のなしたるところである。この功績こそ彼等をして近代經濟學の本來の父たらしむるものである」<sup>63)</sup>と之が功績を指摘し、進んで彼等の資本分析の吟味に移る。

彼は先づ重農主義に於ては資本の労働過程に於ては、生産の資本主義的形態が、社會の生理的形態として把握され、人間の意思政治等々から獨立的に考へられてゐることは一つの功績であるが、これが一つの永久的自然的形態に於て理解されてゐる點に問題があることを指摘し、資本の流通過程の分析に於ては、資本の流通過程と再生過程の聯關を明かにし、ことに流通過程が生産過程に於ける一形態として把握されてゐる點をたゞふ。

さてこの二つの點に於ける重農主義の功績は没し得ないが、然らばこれは如何なる基礎に立ちて行はれたか。この點には尙種々の問題があるとして、彼等の餘剩價値の把握を取上げて問題とする。我等がケネーの純收益論によつても知る如く、彼等の餘剩價値は飽迄も生産物であり素材であり、これが流通過程に入ると直ちに貨幣價値が導き入れられるのである。マルクスの批判もこの點を突いてゐる。即ちマルクスによれば彼等の餘剩價値は餘剩労働ではなく、使用價値であり素材であり、即ち消費以上に出る生産物の餘剩であつて、これは自然の賜として理解され、社會的労働の形態として把握されてゐず、然る限り、農業労働のみが餘剩價値の創造者として理解されざるを得ないのは一つの必然的結論であ

り、これも要は價值分析の不十分より來る所にして、若し價值を労働量或は労働時間と云ふが如き社會的形態に還元し得たなれば、必然、彼等の如き使用價值の増殖を交換價值のそれと混同したり、生産的なものは獨り農業のみとなす如き誤には陥らなかつたであらうとする。更にかゝる矛盾のよつて來る背景としては資本制生産が封建社會より抜け出たばかりで、この封建的社會をたゞより多くブルジョア的に解釋して行かうとして、自らの固有の姿を未だなほ發見してゐなかつた資本主義的生産の矛盾をあぐ。然しマルクスも重商主義者が餘剩價值の成立を流通過程より生産過程に移して考へた功績は十分認めてゐる様である。

次にケネーの經濟表に對する彼の批判を吟味するに、この經濟表が極めて簡單なる圖表の中に社會總資本の再生産過程を畫き出したもので、ブルジョア階級のもつた最初の經濟學であることは周知の如くである。然しこれもよくみつめれば種々の問題がある。今「經濟表略表」<sup>(64)</sup>について見るに、第一生産階級が總て賃労働者として扱はれてゐること、第二に生産階級では原前拂は年前拂の五倍となつてゐるが、不生産階級では原前拂が省かれてゐる、第三に再生産は五十億ではなく、生産階級五十億不生産階級二十億である、第四に不生産階級が自己の生産物二十億を生産階級並に地主階級に賣つた後、自己の消費すべき自己の製品も残らず利潤も残らないがこれは誤である。これがマルクスの批判の重點である。

問題は最後の點にある。マルクスはポドウの工業者は價值以上でその商品を賣ることによる説明を援用してゐる。而してこれは重商主義の賣渡し利潤説に陥るわけで若し然らずんば工業に於ける生産性を認めねばならぬことをほのめかしてゐる。然しこの點は私のケネー理解にして誤なかりせばケネーの主張でも十分説明出来る所と思ふ。ケネーの云ふ所はかうである。不生産階級は、生産階級より材料に附加すべき自己の生活資料に等しいものを受けとる。これが「略表」の十億である。而して不生産階級は、材料十億に於ける節約はさておき、この生活資料十億には十分節約が可能である。こゝに不生産階級の收益なるものが作られるのではないか。不生産階級に於ける原前拂の前提の不備の問題は別として、收益の點は少くもケネー自身かう考へてゐたのではなからうか。ケネーの言葉の中に屢々この意味のことが汲み取り得らるゝ所であつて、然る限りケネーの經濟表自體は商工業を不生産として一應説明がつくと思ふ。ケネーが不生産階級は節約によつてのみ収益を増し得ると力説せるはこの誤解を除く爲の豫備工作とさへ思はれる。

尙マルクスも云ふ如く、ケネーが使用價值素材概念を離れ得ざりしことは一應認めねばならない。然しケネーが財を分つて使用價值と賣上價值とになし、この兩者の相互關係について極めて注目すべき論述をなしてゐることは、彼の隠れたる一功績として附加出来ると思ふ。ケネーの價值論の混亂を攻撃せるものはこの點を忘れ勝であり、これは彼の名論文「Homes」が餘り讀まれます、埋藏された爲でもあ

\* この原稿は Quesnay が1757年 Encyclopédie に掲載のため執筆し、後巴里の國立圖書館に保存されてゐた。1886年 Stinne Bauer によりケネー全集出版後發見され、前述の雑誌の1908年創刊號に掲げられ多くの人々に讀まれ得るに至つた。

らうが、本論文に於いては使用價值と交換價值の例證に、ダイヤモンドと食糧品を以つてするが如き、ダイヤモンドと水を擧げるスミスのそれと表現までも相近きものあり、かゝる價值概念の定立はスミス以降のそれを殆んど完全な形で現はしてゐるものであるとも思はれ、この點又ケネーの功績として附加したい。

以上私はケネーの商業理論を考察し、これに對する二三の學者。特にスミスとマルクスの批判を擧げ若干の私見を展開しておいた。次に以上の考察を基礎として、ケネーの商業學說の地位について一考してみたいと思ふ。

### 三、ケネーの商業理論の地位

ケネーの學說が封建社會より抜け出したばかりの、而して、重商主義が戦ひ取つたところの資本主義生産の内容が愈々充實發展して行かうとする時代、云はば資本主義の黎明期青春期とも云ふべき時代を背景とせるは周知の所である。こゝでは勞資の分裂も未だ人々の注意を引いてはゐなかつたが、既にその原理を獲得せる資本主義には將來の輝ける未來が約せられて居た。今やケネーの學說はかゝる時代の分析に出發する。背景は研究態度を支配する。資本主義の將來に關して何等かの不安におびやかされた後の學者とは異り、青春期を研究の對象とせる彼は、主觀的には、何の怖る所もなく、これが解剖分析を企て

た事は云ふ迄もない。彼は資本主義生産を一つの絶對的自然的なものと信じたことは上述の如くであるが、この信念は、假令一定の限界ありとはいへ、資本主義機構のより勇敢なるより科學的なる分析を遂げることを得しめたものとも云へるのである。彼の見出した眞理——天才的勞作と云はるゝものゝ中には後の學説を支配する極めて重要なものが決して少くない。今その二、三を拾ひあげて検討しよう。

第一に彼の價值理論に於ける功績も——從來多くは忘れられ勝であつたが——見逃し得ない。上述の如く財を使用價值と賣上價值を有するものと、使用價值のみを有するものに分ち、その相互の聯關を説いたことはスミスその他正統學派の價值論の先驅をなす。特にスミスの自然價格マルクスの生産價格に相當すべき「良價」の状態を考へ競争の完全なる場合は價格はこゝに落着くべく、これを生産費に一定の利潤を含むものなりと考へしはスミスの自然價格論と極めて似通つてゐる。スミスは自然價格は勞賃利潤地代の和よりなると考へたが、ケネーは然らず、價格は賣買に先立ちて存在するものであり、これが費用と餘剰に分れ、費用が小なれば餘剰は大となるとなすのは、スミスを修正せるリカードの價格論に近くさへある。この自然價格は勞賃（ $v$ ）と利潤地代（ $m$ ）よりなるとするのがスミスの見解であるがケネーに於ては $v$ と $m$ の外に $c$ に相當するものを認む。この點ではマルクスの生産價格論に近いものも見出し得る。而して自由商業こそはこの「良價」を齎すものと考へる。

第二に彼の餘剰價值論商業利潤論も注目し値する。彼が餘剰價值の成立を生産過程に見出し、流通過

程はこれを實現するものと考へしはマルクスのそれに極めて類似せることは私の先に指摘せる所である。商業利潤論に於ても、商業は自ら生産するものにあらず、生産階級の生産せるものゝ分前にあづかるのみで、商人は價值以下に買ひ價值通り即ち良價で賣る。商業の介入に拘らず社會的には總價值は一定せるものとの考へはマルクスの考への萌芽を含む。今商業利潤に對する學說史上の重なる見解を述べてケネー學說の地位を明かにせん。(1) 重商主義に於ては、これが成立を流通過程に求め交換はすべて生産的のものとの考へる。尤もこの考へ方も、「眞實の價值」と「讓渡利潤」に分ち後者を市場價格變動より得らるゝそれと考へるスチュアート等に於ては、交換の積極的生產説は排せられてゐるが、價格 $\parallel$ 費用(價值) $\perp$ 賣渡利潤は重商主義時代の根本テーゼであつた様である。(2) 重農主義に於ては商業利潤は農業者の生産せる餘剰の一分裂形態にすぎずとされることは上述の如く、價格 $\parallel$ 價值 $\parallel$ 費用 $\perp$ 餘剰(純生産物) $\wedge$ 農業者の収益商業者の収益なる形で表はされ得る。(3) 正統學派に於ては、たとへばミス等の如きでは、生産過程流通過程の一切の勞賃利潤は價格價值の構成に参加するといふのであつて、自然價格 $\parallel$ 價值 $\parallel$ 勞賃 $\perp$ 利潤 $\perp$ 地代である。尤もこの價格が勞賃利潤地代の和なりとの考へは、後リカードにより價格は勞賃利潤地代に分裂すると修正されしは周知の如くである。然し生産過程のみならず流通過程の勞働の生産性はこの學派の特徴としてあげることが出来る。(4) 效用學派に於ては等價と等價の交換は問題となり得ない。而して商人の賣買には生産者消費者の效用が反映するものと考へ(例へばベエム)、そ

の一般的形態のものに於ては餘剰は節費的地位により成立するものであつて價格 $\parallel$ 限界生産費 $\parallel$ 個別的生産費 $\pm$ 餘剰、この限界生産費の中に商業経費も含むは必然であり、商人はかくて成立した餘剰の分前にあづかることとなる。(5) マルクスに於てはケネー同様流道過程の生産性は否定される。但し工業労働も生産的のものと考へるは兩者異り、商人は農工労働の生産せる分け前にあづかるものであつて、商人は價值以下に買入れ價值通りに消費者に渡すと考へる。即ち今價值と生産價格の一致せる場合を考ふれば價值 $\parallel$ 生産價值 $\parallel$ 仕入價格 $\pm$ 商業利潤。ケネーの商業利潤の把握がこれと酷似せるものであることは先にも述べた如くであるが、ケネーに於ては多くの場合價值は使用價值の意味に用ゐられ餘剰價值が餘剰労働でなく餘剰生産物として把握され、従つて餘剰の最も目につき易い農業を以て獨り生産的と見るの偏面觀に陥りしは私の先に指摘した所である。

(尚これについては拙稿「價格構成に於ける商業の作用(一) 經濟論叢第四十二卷第四號参照」)

第三にケネーの經濟表が社會總資本の再生産過程を簡單なる圖表に表現せるは「資本主義經濟學の出發點」として注目すべきである。こゝに於ては資本制生産形態が人間の意思より獨立に一つの自然的必然的形態として把握されて居り、たとへ生産の資本主義的形態を一つの永久的自然的形態となしてゐるといふ非難はありとはいへ、兎に角、資本の生産行程の全體を再生産行程として流道過程をこれが一形態に過ぎざることを示さんとせる一の試として眞に注目すべき所でなければならぬ。この表に直接目を

通するとき、先づ目につくは、社會資本が。1840の形に構成されて居ること、これはスミスのこれが。1840よりなる。する考へに對比することができ——現在でもスミス派の考へは一部に行はれてゐる」注目すべきである。次に考ふべきは社會的生産物の「分配」が明かにされてゐることで、分配論に於てはスミスもケネーも一歩も出ですと云はれて居る所以もこの表を一瞥するものには了解される所である。ケネーの經濟表と唯物史觀の關係を説く人もあるが、この點でも首肯される節々がないわけ<sup>(6)</sup>ではない。兎に角ケネーの學説は一面スミスに發展すべきものを含むと共に他面マルクスに極めて近きものも多々見出されるのであつて、こゝに又彼の「近代經濟學の父」としての意義もある所と思ふ。我等は勿論スミスの偉大さを見のがすものではないが、ケネーを「近代經濟學の父」と呼ぶ所のマルクスの與へた稱號にも多くのうなづける所があるのである。故福田博士にケネーの學史上の地位を聞けば次の如く述べられてゐる。

「マルクスの餘剩價值學説は、ケネーの此の發見（純生産物）を巧に運用したのに外ならいのでありまして、其の創始の功は一に全く之れをケネーにのみ歸せしめねばならぬのであります。リカルドの勞働價值論及び地代論の二學説も亦、ケネーの此の發見の延長と見るべきものであります。然るにリカルドと其の説に基いて餘剩價值論を唱へたウキリアム・タチスン又其後を承けてマルクスの一派の説を除くはケネーの發見した流通社會の根本動力としての餘剩なるものは、今日までの經濟學に於いて十分に發揮せられて居らないのであります。最近に至つて獨乙のロバ

ト・リーフマンと云ふ壯年學者が出て来て「エルトラーゲ」(収益)なる名の下に、此の餘剰を以て、價格及所得の説明(即ち流通の説明)の根本として居る位に止まつて居るのであります。私は、流通經濟の原理は、ケネーの一度發見した此の循環流通社會の觀念と、其の根本動力としての餘剰價值(ケネーの產物、價值同視論誤りの部分を切り捨て)の觀念とを以て、全體の説明の出立點ともし、又到達點とすべきものなるを確信して居ります」(福田徳三、流通經濟講話、一二六頁)

第四にケネーの經濟説は重商主義の國家主義の對蹠的地位に置かれ、市民主義の代辯の如く考へられ勝である。一部の論者は重商主義を國家主義、重農主義を市民主義、スミズの體系をこれを止揚して國民主義體系の基礎づけを目標とせるものなりとなし、こゝに思想の辨證法的發展を求む。然し果して民福論を主張せるケネーの背後に「國家」が忘れられて居たかと云へば私は寧ろ否定的答をなさねばならぬ。重商主義もケネー一派も共に國家主義者でありフランス主義者である點は少しも變りはない。たゞ重商主義の如く、金銀のみに執着し農を捨て商に走ることが、特に豊沃を誇るフランスに於ては國を富ます所以でも國を愛する所以でもないと考へたからで、「農夫貧しければ國貧し」はこの端的表現であり、これはスペインやローマの興亡の跡を引いていましてあることを以ても知ることが出来る。<sup>67)</sup>この意味で作田莊一教授が「自由主義は個人の自由行動を許容する所の國家的統制の主義であり」「この場合にも國家が初から指圖し得ないやうに社會から擊退されたのではなく、一旦統一主義によつて基礎を固

67) 石川興二氏、國家主義、市民主義、國民主義

68) Du Commerce (Oeuvres, p. 68) Hommes, p. 40. 41.

めた後は、自ら一々指圖しないことが國民經濟の進歩にとつて得策であると見たからである」<sup>(69)</sup>と云はるるのも少くもケネーの場合では——他の自由主義者は尙検討を要しよう——一應我等にも理解される所であり、強いて重商主義より重農主義への思想の發展を辨證法的に見んとするなれば——尤も事實のかる發展の反映にすぎないが——民を考へないこと民を國の一道具と見ることに對するアンチ・テーゼとしてケネーの民福論を擧げ得べく、國家觀念がケネーの頭より去つて居たわけではない。

ケネーの自由主義が一面國家主義的色彩の尙濃厚なことは——尤も形式的には國際主義者と云はれてゐるが——その特徴で、この意味に於て我等はケネーの體系こそ國民主義經濟學の先驅とも見得る所であつて彼の商業理論も一つの國民主義的商業理論と見るべき節々も多いのである。

特に注目すべきはケネーが現實的秩序と自然的秩序を對立せしめ、自然的秩序に即するを以て最も望ましき姿と考へ、自然的秩序の専制主義を容認すると共にこの自然的秩序の専制主義は一人格に具象化すると考へ、それは主権者の人格であり國王のそれであるとし歐洲諸國の放縱なる専制政治を排すると共に、他面議會主義をも排して、合法的専制政治——その理想的形態を支那に見出す——を説いた點である。今日既に資本主義の行詰りが反映して、經濟的思想的に混亂を示して來た時、この社會組織が何所に落着くか、如何に導くべきか多くの識者の頭の中を去來する最も切實な問題である。而してこれが解決を「東洋的なるもの」「日本的なるもの」の中に求めんとせる一部の人々にとつては——その當

否賛否の問題は別として——ケネーのこの思想は甚だ興味ある問題と云ひ得るであらう。ケネー一派の云ふ放縱なる専制政治を現代歐洲フアツズムと、議會主義を市民主義の表現形態と考へ、ケネーの合法的専制政治をこれを止揚せる一つの國民主義的統制に置き代へて考へるなれば、今やその間百五十年の日時を經過し資本主義は黎明期より老年期に達してゐると云はるゝ客觀的事實の相違はあるとはいへ、一つの興味ある對照とも云へ様と思ふ。いづれにせよ放縱なる専制主義（國家萬能主義）を排し、議會主義（市民主義）を排せるケネーが、その政治論に於て東洋的合法的専制主義君主主義を高唱し、こゝに統制の基調を求めしは、賛否の論は別として、我等に何物かを暗示せる様にも思はれるのである。

以上私は先づケネーの資本主義商業機構分析に於ける勞作を検討し、理論經濟學者としての彼の地位につき研究し、次いで彼の經濟政策論、これに必然的に關聯せる政治論につき考察し、この點についても現代に尙興味ある若干の問題を持つてゐることを指摘しておいた。これによつて、我等の知る所は、ケネーが今尙過去の人に非ずして、その間に客觀的事實、時間的經だたりの相違を別として、今日の我等の中にも十分生き得ることを發見出來るのである。「スミスに返れ」の言葉を我等は屢々耳にする。尤もな言葉である。併し私の以上の研究の中から更に、私と共に「ケネーに返れ」の必然的要求のかすかな閃きでも汲み取つていたゞける讀者が一人でもあるなれば又幸とする所である。